

# (スクリプト) 平和とは

基督教独立学園クリスマス記念講演

鈴木寛 (Hiroshi Suzuki)

国際基督教大学名誉教授

2025年12月22日

## 1 はじめに

[no.9]

みなさんは、クリスマスと言うとどんなことを思い出しますか。わたしは、子供の頃、教会学校のクリスマスの劇で、

「いと高きところでは、神に栄光があるように、／地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」。  
ルカ2:14（口語訳）

と言う天使役となつたのですが、何歳かはよく覚えていませんが、自分にとっては、この聖句を覚えるのがとても大変で、間違えずに言えるかとても、不安だったことを思い出します。

野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた羊飼いたちに、主メシアの誕生が告げられたときの讃美のことばが、この「神に栄光、地に平和」だとルカによる福音書に書かれています。

「平和」と言われていますが、平和とは、どのようなものでしょうか。

よくわからないときは、その反対のことば、対義語を考えるのも一つです。「戦争」は「平和」の反対でしょうか。戦争のときは、平和ではないように思います。では、戦争がないときは、平和でしょうか。そのように考えるひともいるかも知れません。しかし、なにか、不十分なようにも、感じます。

みなさんにとて、平和とは、どのようなものですか。

(1:20)

## 2 自己紹介

### 2.1 自己紹介：高校生時代

[no.10]

わたしは、ほとんど皆さんことを知りませんが、おそらく、みなさんも、わたしのことをほとんど知らないと思います。しかし、わたしがどう考えるか、どう感じるかには、わたしがどのような道を歩いてきたかが反映しますから、これからのお話しについて、理解

していただけになることを願って、自己紹介をさせていただきます。

1969年、わたしが、高校一年生の秋、学園紛争が起きました。一部の生徒が他校の生徒と一緒に校長室付近をバリケード封鎖、それから、毎日、政治的な問題などの議論が続き、警察機動隊も入り、数ヶ月間、授業はありませんでした。警察機動隊が、バリケード封鎖を解除したときの様子は知りませんが、それ以外では、とくに暴力のようなものはありませんでしたが、少なくとも平和とは言えない状況でした。

たくさんの議論をしました。自分で問うたり、友達に問われたりして、この頃から考えるようになった問い合わせあります。

- A. 理不尽だと思われることを訴えるために法を犯す決断をする条件は？
- B. わたしがイスラム教の家庭や共産党員の家庭に生まれていたら？

1つ目は、社会に理不尽だと思われることがあったときに、バリケード封鎖までして、授業を妨害すべきだとする根拠や条件は何なのかという問い合わせです。これは、戦争や戦争を始めることにも関係した問い合わせもあります。ロシアやウクライナ、イスラエルやパレスチナのひとたち、ハマスや、ミャンマーの人たちはどうしたら良いのかという問い合わせにもつながると思います。

2つ目。わたしは、クリスチヤンホームで育ち、その価値観がたいせつだと教えられ、信じて育ってきたけれど、普遍性はあるのだろうか。なかなか合意が得られないときに、共有すべき価値観を探し、平和を求め、協力して生きていくには、どうしていったら良いかという問い合わせです。

少し前に、わたしの一つ歳上のロシアの大統領のウラジーミル・プーチンについて[2]の本を読み、最近、わたしの一つ歳下で、ドイツの首相を16年間務めたアンゲラ・メルケルの自伝 [3] を読みました。今は、アメリカ同時多発テロ事件などを主導したとされる、三・四歳下のウサマ・ビン・ラーディンについて学んでいます[4]。わたしと同じ歳の中国の国家主席の習近平についても、いずれ、学んでみたいと思っています。歳が近いと、同じ時代を生きているのでイメージしやすいと感じているからです。

[no.11]

学園紛争で、生徒たちの中にも、分断が広がっていく中、わたしは、教会に熱心に通うようになりました。大学生が多く、その人たちの話を聞き、一緒に行動し、ちょっと背伸びをしているような感じがあり、急に世界が広がった時でした。

その教会の牧師は、戦争のころ、宣教師として東南アジアに行っておられ、戦後すぐ「つぐないのわざ」として、東南アジア学生寮を作り、アジアの戦争孤児や、日本軍の兵隊と、現地の女性との間に生まれたこどもを、日本に留学や職業研修のために招いていました。

日本の若者が、学園紛争など混迷の中でエネルギーを使い果たすのではなく、次の時代のために東南アジアをじかに見、アジアの人々と直接交流する機会を持ってほしい。

と折に触れて言っておられたこともあり、青年会のメンバーで、東南アジアに、行くことにしました。先生とも親しい海運会社が、貨物船の空いている船室にユースホステルと同

等の料金で青年を乗せてアジアを回るツアーを企画しており、そこに、大学生六人とわたしの合計七人で参加することにしたのです。

旅行が計画されてから1年近く、皿洗いや、旅館の手伝い、中小企業での部品の組み立て、タイプライターのセールスなどのアルバイトをして、お金をためました。振り返ってみると、アルバイトでは、大変な経験もしましたが、さまざまなことを学ぶことができたと思います。

(5:55)

## 2.2 東南アジア53日間貨物船の旅

[no.12]

1970年高校二年の夏、貨物船の旅に出ることになりました。

スライドの写真は、出発のときに、見送りの人と共に、横浜の本牧埠頭で撮った写真です。後ろの列の中央に私が写っています。牧師夫人、お嬢さんお二人、寮母さんのお孫さん、シンガポールからの研修生が写っています。この方は日本軍による、シンガポール華僑虐殺事件の遺児、犠牲者の息子さんです。

[no.13]

日本から中古のブルドーザーや工作機械を積んでシンガポール（Singapore）やマレーシアのペナン（Penang）という自由貿易港でおろし、インドネシアのボルネオ島のバリクパパン（Balikpapan）とサマリンダ（Samarinda）に寄り、ラワンという材木を積んで、韓国の釜山でおろすという53日間の旅でした。

旅行の準備の期間も、旅行中も、聖書や英語やアジアについての勉強会をしました。西洋の植民地からアジアの人々を解放するという名目で、アジアに進出し、労働力や資源を日本の植民地のように使い、戦争のために略奪し、虐殺も含め、日本軍が武力で現地の人たちを支配していった歴史を学び、日本人としての戦争責任の重さを感じ、アジアの人たちとどのように向き合えば良いのか正直不安になっていきました。

[no.14]

訪問先では、教会を訪ね、また、さまざまな人たちと会いました。ある程度年配の方の多くは、日本人が嫌いで、憎しみを持っていたり、日本の経済的な発展を、妬ましく思っていました。皆、非常に貧しい生活をしていて、さまざまな方法でお金を稼ごうとしている子供達や、性的なサービスをしないと生きていけない若い女性たちとも出会いました。しかし、必死に生きている姿を見て、わたしは、その人たちに日本人のしたことについて謝って回るより、「同じ時を、ともに生きるものとして、責任をもって生きていくことが、たいせつなのではないか」と思うようになりました。あまり良い表現ではないかもしれません、「違った世界で生きていても、この人たちのことを覚え、この人たちに恥ずかしくない生き方をして、生きていこう」と決断させられたということでしょうか。

この考えは、学園紛争による分断で、違う側にいるようになってしまった、直前まで親しくしていた人と共に生きることを考えるなど、その後も、人生のさまざまな時に、自分が何をたいせつにするかの決断に、影響を与えてきました。もちろん、反省もありますが。

(8:45)

貨物船での旅行は、いろいろな思い出もあります。何人か仲間が船酔いになって勉強会が続けられなくなったときは、わたしは、酔わなかったので、残りの大学生と麻雀ばか

[no.13b]

りしており、麻雀もそこそこ強くなりました。船操縦室や機関室に入れてもらい、航海について教えてもらったり、ベトナム戦争中でしたので、アメリカの第七艦隊のたくさんの艦船と緊張のうちにすれ違ったり、天の川がわからないぐらいの満天の星、このとき初めて人工衛星も見ました。船を追いかけてくるイルカもたくさん見ました。飛魚が甲板に飛び込んできたので捕まえて、夕食に焼いてもらったり、材木がなかなか来ない時は、船員さんが救命用ボートを下ろしてくださり、ボートを漕いで行って、地元の漁師から魚を買ったり。すごい台風にもあり、船が木の葉のように揺れたり。韓国では、戒厳令が敷かれていて、さらに、コレラも流行っていて下関で検疫のために留め置かれたり。実は旅程も正確には決まっておらず、電信で情報を得て、材木の上げ地が韓国になったことを知ったのは、かなり後になってからでしたし、横浜に船が戻り、家に帰ってきたのは、二学期が始まって二週間以上経った時でした。

(10:13)

## 2.3 その後の共に生きる歩み

[no.15+]

高校卒業後、わたしは大学で数学を学び、大学院の途中からアメリカに約三年間留学、地方国立大学に就職が決まり、数学の研究に集中する楽しさも経験していた頃、ICUと呼ばれることが多い、国際基督教大学という、キリスト教主義のリベラル・アーツ大学に、異動することになりました。

ICUに移る少し前から、アジアの大学の数学研究の支援を始めましたが、ICUに移ってからは、数学の研究・教育だけでなく、さまざまな困難を抱えた学生の学修を支援する、学生学修支援、障害者の支援、タイの山地族の村でのワークキャンプ、サービス・ラーニングというプログラムで、国内だけではなく、中国、韓国、フィリピン、インドネシア、タイ、インド、ケニアなどでの活動を企画し、学生を送り、同行して一緒に学ぶこともしてきました。

学内住宅の我が家で、木曜日の夜に、誰でも歓迎することをたいせつに、ディスカッション・スタイルの聖書の会を開き、退職まで16年ほど続けました。人数が少ない時もありましたが、妻がお茶やケーキを準備してくれたからでしょうか、最後は、毎週20人から30人集まる会っていました。5年ぐらい経った頃でしょうか、独立学園出身者が出席してくださるようになり、それ以降は殆ど全員、聖書の会の中心メンバーとなっていました。中島（磯）怜美先生もそのお一人です。何を言っても良い、他のひとの話を聞いているだけでも良い、黙ってケーキを食べお茶を飲んで、おしゃべりをするのもよい、居心地の良い場だと思ってくださった方がたくさんおられたのかなと思います。

学びの場であるとともに、仲間との心地良い居場所だったのかもしれません。ひとが学び、成長していくには、「居場所」と言えるものが、重要な気がします。わたしにとっては、教会や、青年会の仲間との時が、成長することができた「居場所」だったように思います。その「居場所」の一つを、我が家が提供できていたのかもしれません。基督教独立学園の皆さんにとっては、ここ、学園が「居場所」になっているのかなと羨ましく思います。「居場所」は、それぞれ離れていても、育った場所として、一生たいせつなものであり続けるように思います。

わたしが大学3年生のころ、児童養護施設で働くかないと、声をかけてくださった園長さんがおられたのですが、その方は、わたしがアメリカに留学してすぐ、癌でなくなられました。児童養護施設は、奥様が引き継いでおられ、ICUから近かったこともあり、理事として、関わるようになりました。

これは、退職してからですが、コロナで、小中学校がお休みになったときに、頼まれて、こどもたちの学習時間に、毎日、学習支援に行きはじめ、そのあとも勉強が遅れているこどもを見ていた時期もあります。コロナのときは、職員さんも非常に大変だったので、お手伝いで、宿直ボランティアもするようになり、それは、回数は減りましたが、今も続いています。

また、現在は、障がい者の就労支援施設のお手伝いもしています。

わたしは、ずっと大学で教えてきたわけですが、聖書の会や、児童養護施設や、障害者就労支援施設、そして、サービス・ラーニングなどで、伺う国内外の施設では、わたしとは、まったく異なった歩みをしておられる方とたくさん出会うことができました。他者にとってたいせつなことは、なかなか分かりません。しかし、そう簡単には、わからないけれどたいせつなことがあること、そして、優劣ではなく、その一人一人の人生がたいせつであることを、それぞれの場で学ばされてきました。そして、その出会いがわたしにとっての「宝物」になっているのだと思います。ここ、基督教独立学園でも、今回は三日間の滞在ですが、みなさんと、そのような出会いが、できればと願っています。

(14:55)

### 3 聖書の理解

#### 3.1 突風を鎮める

[no.16]

今回の聖書の箇所を、少しずつ見ていきましょう。まずは、前半、イエス様が嵐を鎮められたという記事です。すでに、読んだことがある方もおられるかも知れませんが、読まれたことが無い方も含めて、能動的に読むには、問い合わせをもつと良いと思うので、以下のことを考えながら読んでみましょう。

1. どのような時に起こったことでしょうか。
2. どのような人がその場にいるでしょうか。
3. 舟については、どのようなことがわかりますか。
4. 嵐の状況はどのように描かれていますか。
5. 弟子たちはどのように反応していますか。
6. イエスについてはどのように描かれていますか。
7. 結果については、どのように書かれていますか。

ほんとうは、みなさんに考えていただき、答えていただくのがよいのですが、今日は、講演ということですから、わたしが書かれていることから答えていきましょう。もちろん、それが正解というわけではなく、ほかにもいろいろな取り方があると思います。

■1. いつ? 背景? 最初から見ていきましょう。「4:35 その日の夕方になって、イエス

は、『向こう岸に渡ろう』と弟子たちに言われた。36 そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。」とあります。

[no.17,18]

すでに、夕方になっていたようです。ガリラヤ湖という湖のほとりにいますが、この記事の直後5章1節に「5:1 一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。」とあります。ガリラヤ湖は、東西13km、南北21km、周囲53km の湖です。このときどこにいたか明確には書かれていませんが、おそらく、カファルナウム付近と思われます。今は、米坂線では小国まで来れないようですが、学園から小国は、11km ぐらいですが、地図を見る限り、おそらく、それぐらいの距離、舟を漕いで移動したのかなと思います。

[no.16b]

■2. 誰? これは、弟子たちがイエスと一緒に居たとしか書かれていませんが、少し前の4章10節には、「イエスがひとりになられたとき、十二人と、イエスの周りにいた人たちとが、たとえについて尋ねた。」とありますから、十二人以外の弟子もいたのかも知れません。また、対応するルカ8章1-3節を見ると、一緒に女性たちがいたことも書かれていますから、十二弟子以外にも、女性たちもふくめ、何人の人が一緒に舟にいた可能性があります。

■3. 舟は? 「ほかの舟も一緒であった。」(4:36b) この「ほかの舟」、ヤコブとヨハネという漁師の兄弟が含まれており、ヤコブとヨハネの父ゼベダイの家は雇い人もいる網元のような家だったことが書かれていますから、彼らの舟だった可能性が高いように思います。ある程度の人数が何艘に分かれて乗っていたのでしょう。網を使って魚を取っていたようですし、ガリラヤ湖に今もいる、St Peter's Fish と呼ばれる魚は、長さ40cm 重さ1.5kg とも言われていますから、もし、これを網で取るとすると、ある程度の大きさの舟だったと思われます。発掘調査によると、長さ8.2m 幅 2.3m ぐらいの舟が一般的だったようです。両手をいっぱいに広げた長さと身長は、ほぼ同じだと言われています。女子高校生の身長の平均は、160cm 弱だから、女子高校生が五人両手をいっぱいに広げてつながったぐらいの長さです。あとで実験してみると良いかもしれません。よく、池にある手漕ぎボートと比較すると、かなり大きいものだと考えてよいと思います。

■4. 嵐の状況は? 「37 激しい突風が起り、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。」とあります。実は、ガリラヤ湖は、海平面より200m ぐらい下の谷にあり、丘や山に囲まれていて、そこから強い風が吹き下ろすこともあるそうです。

■5. 弟子たちは? 「弟子たちはイエスを起こして、『先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか』と言った。(38) とあります。この弟子たちが、誰かはわかりませんが、わたしは、漁師以外の弟子たちだと思います。女性や、このような突風になれない人たちにとっては、舟が水浸しになったら、それは恐怖です。出発したのはすでに夕方でしたから、もし夜になっていたら、とても怖かったと思います。夜の海、大きな湖は怖いですよ。

[no.19]

しかし、実際には、水が入ってきてても、舟はなかなか沈まないようにできています。漁師たちは、必死で、舟を探っていたと思います。わたしも、貨物船での旅で、台風にあいました。これは、145m、9500トンの舟ですから、彼らの舟と比較するととてもなく大

きな船ですが、台風のときは、pitching and rolling と言って、縦揺れの piching と横揺れの rolling で、舳先（へさき）は完全に水に埋まり見えなくなり、次の瞬間、ガードに戻ってきます。操舵室から見ていましたが、復元力はあまりに凄いので驚きました。横揺れも、階段が横向きについていましたが、垂直ぐらいになりますから、揺れて逆に平らになったときに、いそいで移動というような感じでした。その中でも、三角波と言われるものは危ないので、船長さんや航海士は、何人もで、方々に目を配って、船を操っていました。彼らの舟も、水がいっぱいになっても、そう簡単には、沈まなかつたはずです。でも、必死さは伝わってきます。

[no.16b]

■6. イエスは? 「38 しかし、イエスは艤（とも）の方で枕をして眠っておられた。39 イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、『黙れ。静まれ』と言われた。すると、風はやみ、すっかり嵐になった。40 イエスは言われた。『なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。』」とあります。艤（とも）というのは、舟の後ろの方で、そこは安定しています。それでもこの状態で眠っておられるというのは、かなり疲れておられたのかも知れません。おそらく、舵を握っているような、舟を操っている一人は、その近くにいたのではないかと思います。実際に、どのように、突風が収まったのかはわかりませんが、嵐になった。水面が平になったとあります。イエスは、「なぜ怖がるのか。まだ信仰がないのか。」と言っておられます。イエスは、怖くはなかった。弟子たちも「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないですか」と言っていますから、「先生は大丈夫かもしれません」と思っていた印象も受けます。弟子たちは、なぜ、怖かったのでしょうか。みなさんは、どんなことが怖いですか。私は、何が起こるかわらかない、未知のものに対する恐怖かなと思います。その最たるもののが、死でしょうか、ここでは、溺れることだったのでしょうか。イエスは、風を叱る必要はなかったはずです。叱ったのは、弟子たちのためなのでしょう。「まだ」と言っていますから、イエスと一緒にいたら、なにか、たいせつなことを、学んでいることがあるはずだと言っているように見えます。それは、不信頼にならず、怖がらず、信頼できるはずだと言っているのでしょうか。そのような正しさをもって厳しく言っておられるのでしょうか。

■7. 結果は? 最後には、「41 弟子たちは非常に恐れて、『いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか』と互いに言った。」とあります。イエスの認識を改めたときだと書かれています。

■疑問 いくつか疑問が湧きます。なぜ、イエスは、怖がらなかつたのか。イエスが信仰と言っているものはどのようなものなのだろうか。弟子たちは、なぜ、『一体この方はどなたなのだろう。風も湖さえも従うではないか』とこのように表現したのだろうかということです。

最初の問いは置いておいて、との問いは、わたしは、漁師たちのことばだったのではないかと思います。ガリラヤ湖を仕事場としていた漁師は、このような嵐には何度も出会っていたでしょう。こんなことで怖がる必要はないとも思って、しかし、必死で、漁師の力を見せてやるぐらいの感じで、舟を操っていたのではないかと思います。怖がっていたひとたちは、ああ良かった。溺れないで良かったぐらいの気持ちのほうが、強かったです。

思いますが、漁師たちにとっては、「風や湖さえも従う」は、驚くべきことだったでしょう。

わたしは、マルコによる福音書は、11章でエルサレムに入られるまでの部分は、ペトロなどが語っていたことがまとめられていたのではないかと考えています。ここでも「ほかの舟も一緒であった。」とあまり本筋に関係ないことも書かれており、他の箇所にも、舟のことがよく出てきますし、長い説教は出てきません。行動の記録が中心になっています。そう考えると、ここでも、ペテロたちがどう考えたかが、『いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか』ということばで表現されているのではないかと思います。

さて、その上で、なぜ、イエスは怖がらなかったのか。ギリシャ語の「信仰」は、「信頼」や「忠実」とも同じ言葉ですが、ここで言われている「信仰」とはどのようなものなのでしょうか。

(25:46)

### 3.2 平和とは（1）

[no.20]

さて、最初に「平和とは」という問い合わせかけました。嵐の中では、弟子たちは、平和ではない状態だったでしょう。それが突然、平和な状態が訪れた。何によって変わったのでしょうか。イエスの一声だとも言えると思います。しかし、イエスは、元々、怖がらなくて良かった、信仰を持っていればと言っているようですから、もしかすると、最初から、この舟は、平和の中にいたのかも知れません。どう思われますか。

最初に、ルカのイエスの誕生に関する箇所を引用しましたが、イエスの誕生については、マタイによる福音書にも書かれています。そこには、ヨセフに次のようなことばが告げられたとあります。

1:22 このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言っていたことが実現するためであった。23 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。  
(マタイ 1:22,23 新共同訳)

イエスがおられるということは「神が我々と共におられること」だと言われているようです。これは、どのような意味なのでしょうか。イエスと一緒にいれば安全だよということなのでしょうか。

(27:06)

### 3.3 悪霊に取り憑かれた人を癒やす

[no.21]

では、後半をみてみましょう。また、問い合わせてみます。

1. どのような時、背景において起こったことでしょうか。
2. どのような人がその場にいるでしょうか。
3. 悪霊に取り憑かれた人についてどのように表現されていますか。
4. イエスとこのひととのことはどのように書かれていますか。

5. どうなりますか。
6. 豚飼いや町や村の人々はどうしますか。
7. 悪霊に取り憑かれた人についてはどのようなことが書かれていますか。

[no.22]

■1. いつ? 背景? 5章1節「5:1 一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。2 イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた靈に取りつかれた人が墓場からやって来た。」とあります。これは、偶然のことなのでしょうか。最後、実は次の話の最初には、「21 イエスが舟で再び向こう岸に渡されると、大勢の群衆がそばに集まって來た。イエスは湖のほとりにおられた。」とあります。もと居たところに戻ったようですね。ということは、この湖の向こう岸に行って、すぐもとの場所に戻ったわけですから、わたしは、このひとの噂を聞いて、イエス様は、弟子たちを連れて嵐にあいますが、わざわざこのひとに会いに行ったのではないかと思います。

■2. 誰? ここには、誰がいると思いますか。まずは、汚れた靈につかれたひとがいますが、この人については、次に見ることにしましょう。後からは、豚飼いや、町や村の人々が登場しますが、すくなくとも、イエス様はおられ、おそらく、弟子たちもいます。不思議なのは、ここには、ある程度の数の、弟子たちが居たはずですが、彼ら・彼女らは、何も言いません。なぜでしょう。

ここには、豚飼いが登場し、町や村のひとたちも、話しています。ユダヤ人は、豚を汚れた動物としていましたから、この町や村のひとたちは、ユダヤ教徒ではない人たちだったのでしょう。

■3. 悪霊に取り憑かれた人? さて、このひとについて、どのように聖書は記しているか見てみましょう。

2 イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた靈に取りつかれた人が墓場からやって來た。3 この人は墓場を住まいとしており、もはやだれも、鎖を用いてさえつなぎとめておくことはできなかった。4 これまでにも度々足枷や鎖で縛られたが、鎖は引きちぎり足枷は碎いてしまい、だれも彼を縛っておくことはできなかったのである。5 彼は昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたりしていた。

「汚れた靈に取りつかれた」は、誰の判断かはわかりませんが、聖書記者はそう記し、イエスも「汚れた靈」と呼びかけたと書かれています。そして、墓場に住んでいます。かつ、足かせや鎖で何度も繋いだが、鎖を引きちぎり、足かせを碎くので、誰も彼を押さえつけることができなかった。とあります。墓場に住んでいるというだけで、驚かされますが、町や村には、住まわせてもらえなかったのでしょう。このあとも、鎖や足枷のことが書かれていますが、すくなくとも自分でこれらをはめたわけではありませんから、誰かに繋ぎ止められ、拘束されたのでしょう。昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたりしていた、とあり、異常行動とも言えますが、自傷行為もしていたとありますから、自分でも、どうしたら良いかわからない状態だったのかも知れません。

みなさんは、このひとをどのようにみますか。異常なことは、確かですが、どのような

ことによって、このような状態になったかは、書かれていません。いつからなのか、生まれつきなのか。ただ、周囲の人にとっては、どこかに繋いでおきたい、すくなくとも、自分たちからは離れていて欲しいと思ったのでしょうか。

わたしは、大学で教えていたころから、精神疾患を患っておられる方、そして、精神的なことで苦しんでおられる方と何人も接してきました。少し前ですが、精神科の病院に入院されている方を見舞いに行くと、動けないように、拘束されている場合もありました。お年寄りも、いろいろな理由で、自由が奪われ、拘束されることもあり、また、拘束することがあるということに家族が同意しないと、入院できない場合もあります。病院は、それだけ、大変な場でもあるのでしょうか。

ここは墓場だとあります。墓場では、少なくとも、継続的に、簡単に食べ物は得られないと思いますから、何らかの方法で、食べ物は得ていたのでしょうか。もしかすると、家族が、他の人には見つからないように、運んでいたのかも知れません。

「石で自分を打ちたいたりしていた」はどのように理解したら良いのかわかりませんが、もしかすると、自分の存在自体を消し去りたいと思うような時があったのかも知れません。

#### ■4. イエスとこのひと さて、このような人と、イエスは、どう向き合われるのでしょうか。次のように書かれています。

6 イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、7 大声で叫んだ。「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい。」8 イエスが、「汚れた靈、この人から出て行け」と言わされたからである。

非常に短いですが、どうも、「汚れた靈、この人から出て行け」とイエスが言うと、それに対して、「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい。」と大声で叫んだ。とあります。イエスは、このひとつ、汚れた靈を区別して、汚れた靈に、命じられているようですが、答えてているのは、おそらく、汚れた靈なのでしょうが、苦しめないでほしいと言っていますから、このひとの中から出た言葉なのか、それとは、まったく独立な、汚れた靈という実体があるのかはわかりあませんが、おそらく、苦しみが表現されているのでしょうか。

しかし、その次には、唐突に感じますが、イエス様は「名は何というのか」とお尋ねになっています。「名はレギオン。大勢だから」だと答えています。レギオンは、大勢という普通名詞でもありますが、ローマの兵隊の一大隊という意味にも使われ、その場合は、時代にもよるようですが、五・六千人ぐらいの部隊を意味していたようです。多重人格ということばもありますが、どれが自分なのか、自分と思われるようなものがたくさんで、区別もつけられない、混乱した状況だったのかも知れません。

私は、専門家ではありませんから、正確には言えませんが、この人は、自分の視点に混乱があり、客觀性をもって、自分や、他者を見ることができない状態なのでしょう。ある事件を通して、パニックになってそうなる場合もあるようです。

ここで、イエスは、名前を聞いています。それは、自分について、または、他者がどう呼んでいるかを聞いているのでしょうか。他のひとを傷つけるようなことについては、書か

れてありませんが、自分を傷つけることは、書かれていました。いないほうがありがたい存在、迷惑な存在とみられていても、イエスは、あなたのこと教えてください。あなたは誰ですか、あなたの名前はと聞いておられます。この問い合わせから、どのようなことが起きたかはわかりませんが、すくなくとも、他の人とは違う接し方をイエスがしたことは確かでしょう。

[no.22]

■5. 結果は？ 豚のことが書かれていて、これが印象的なので、そこに、引き寄せられてしまいますが、このひとについてはどう書かれていますか。15節には、

15 彼らはイエスのところに来ると、レギオンに取りつかれていた人が服を着、正気になって座っているのを見て、恐ろしくなった。

とあります。なんと、服を着、正気になって座っていたのです。実際には、何が起きたのか、書かれてはいません。

■6. 土地の人々？ これに対して、

16 成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれた人の身に起きたことと豚のことを人々に語った。17 そこで、人々はイエスにその地方から出て行ってもらいたいと言いました。

つまり、豚飼いや、町や村のひとたちは、このことを受け入れられず、かえってパニックになってしまっているように見えます。

■7. このひとは？ このひとについては、以下のように書かれています。

18 イエスが舟に乗られると、悪霊に取りつかれていた人が、一緒に行きたいと願った。19 イエスはそれを許さないで、こう言わされた。「自分の家に帰りなさい。そして身内の人には、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい。」20 その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとくデカポリス地方に言い広め始めた。人々は皆驚いた。

■豚について 豚のことはどう考えたら良いのでしょうか。わたしも正直よくわかりません。豚は死んだようです。これはおそらく経済的には大きな損失で、それは、だれの責任によって起きたのか。汚れた靈か、イエスが止めることができたら、イエスの責任か。ただ、書き方からすると、豚飼いは、雇い人で、この人たちが大きな損失を被ったのではないかも知れません。

しかし、少なくとも、このことによって、汚れた靈がこのひとから出ていったことが、みなに示されたと思いますし、そして、このひともそのことを知ることができたのではないかと思います。

(37:12)

### 3.4 平和とは (2)

[no.23]

今回、最初に嵐の話をして、「まだ信じないのか」ということばから、イエスと一緒に

行動をともにしていると、信じることができるようになること、わかるようになることがあることが書かれていましたから、その次に書かれている、汚れた靈につかれたひとの話を読みました。ここでは、弟子たちは、ひとことも喋っていませんが、経緯から、一緒にいたはずです。もしかすると、ここにいて経験したようなことが、嵐の中での信仰にも関係しているのかもしれません。

この話で、平和とは何なのでしょうか。

この汚れた靈につかれているひとは、「昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていた。」(5) ですから、平和はなかったでしょう。そして、この人は、イエスが来ると「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい。」(7) と叫んでいます。神は、そして神の子イエスは、自分を苦しめる存在だと思っていたようです。

では、町や村の人々や、豚を飼っているひとたちにとっては、どうなのでしょうか。最初の状態は、このひとたちにとっては、平和だったのかも知れません。汚れた靈につかれている人を、枷や鎖でつないでおけば、平和に暮らしていたかも知れません。しかし、イエスが来て、このひとから汚れた靈が追い出され、このひとが、服を着、正気になって座っているのを見ると恐ろしくなり、イエスに出ていって、もらいたいと願います。

平和とは、どのようなものなのでしょうか。最初に、戦争のない状態でしょうか。と聞きましたが、イエスがなにもしなければ、このひとたちは、平和だったのかも知れないのです。

この物語の最後をもう一度見てみましょう。「イエスが舟に乗られると、悪靈に取りつかれていた人が、一緒に行きたいと願った。」(18) とあります。しかし、「イエスはそれを許さないで、こう言われた。『自分の家に帰りなさい。そして身内の人には、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい。』」(19) そして、「その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとくデカポリス地方に言い広め始めた。」(20) とあります。つまり、まず、身内の人には「主が自分を憐れみ、自分にしてくださったことを知らせ」ることをし、そして、さらに、デカポリス、すなわち、町や村のひとたちを含め、さらに広い地域のひとたちに、語ったのでしょうか。

その結果は、「人々は皆驚いた」とだけ書かれていて、それ以上は、書かれていません。どうなったのでしょうか。

(40:03)

## 4まとめ

### 4.1 イエスと弟子たち

[no.24]

イエスは、2000年ほどまえに生まれ、私たちが知る限りでは、成人してから、三年ほど、弟子たちとともに歩まれました。最初にお話ししたように、十二弟子だけではなく、女性も含めほかにも一緒に行動した人たちがいたようです。しかし、どうも、本を書いたりはしなかったようです。

たとえば、人殺しや、戦争はいけませんよとか、神様を信頼して信仰をもって生きなさい、というような「正しさ」であれば、それは、律法や預言者と呼ばれる旧約聖書のよう

に、文書で残した方が正確に伝わりやすいように思います。しかし、それは、イエスはしなかったようです。

しかし、イエスと行動をともにしていると、イエスのことばが意味を持ってきて、伝わることがあったのではないかでしょうか。そこで、福音書記者も、イエスの教えだけでなく、イエスがどう行動したかを伝えています。

みなさんと、一緒に、特に福音書を丁寧に少しづつ通して読むのが良いのかと思いますが、それはできませんから、ある部分を読んでみました。

ここからは、少し、急足になりますが、鍵となると思われる、イエスのことばを、三ヶ所だけ取り上げてみます。

まずは、イエスの宣教の第一声です。

1:14 ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、

15 「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

マルコ1章14節・15節（聖書協会共同訳）

[no.25]

第一声は、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」です。中心は「神の国は近づいた」というメッセージです。神の国は、神様の支配とも言い換えられると言われていますが、もう少し、簡単なことばでいようと、「神様の御心がなる世界がすぐそこにあるよ」ということのように思います。もし、そうであれば、ある人が、異常だということで、枷や鎖で繋がれ、生きていても仕方がないと自分で考えるような状態からの変化は、この「神様の御心がなる世界がすぐそこにあるよ」ということを示しているように思います。

信仰とは、神様の御心がなることへの信頼。すなわち、「神の国は近づいた」というイエスのメッセージをうけとることかも知れません。

先程読んだ聖書の箇所で、一緒にいたはずの弟子たちはなにを学んだでしょうか。イエスは、激しい突風で、舟は波をかぶって、水没しになるようなことを経験しても、神様に信頼しているようで、向かった先では、一人の人から、汚れた靈を追い出し、このひとには平和が与えられたようです。おそらく、イエス一行は、まさに、このことのために、ガリラヤ湖の向こう岸、異邦人の土地にまで行ったと考えてよいでしょう。

わたしは、平和ということばが適切かどうかは、わかりませんが、自分の存在を消し去りたいとさえ思っていたような汚れた靈につかれたひとに、とくべつなことが起こり、神の国、神の御心がなる世界について、思い巡らす切っ掛けが与えられたのではないかと思います。みなさんは、どう思われますか。

[no.24b]

二つ目は、イエスが「第一の掟」または、戒め、もっともたいせつなこととして伝えている箇所です。

12:28 彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた。「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」29 イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。30 心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽

くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』31 第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかはない。」 マルコ12章28節-31節（聖書協会共同訳）

[no.25]

律法学者は、第一の戒めと聞いているのに、イエスは第一、第二と二つ答えているようです。「神を愛し、隣人を愛せよ」二つと考えることもできますが、一つだと考えることもできるかもしれませんと、わたしは思います。つまり、神を愛することは、神様が愛しておられるあなたの隣人を愛することだよ、と。わたしは、これを、次のように言い換えてときどき唱えています。

たいせつな方をたいせつにすることは、たいせつな方のたいせつなひとをたいせつにすること。

イエスは、このひとに『自分の家に帰りなさい。そして身内の人々に、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい。』(19)と伝えました。これも、神様が、自分を苦しめる方ではなく、憐れみ深いかたであることを知り、それを伝えることなのでしょう。そして、それは、神様にとってたいせつな他者、まず身内の人をたいせつにすることでもあるのでしょう。さらに「その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとくデカポリス地方に言い広め始めた。」(20)自分のようなものをもたいせつにし、愛してくださいたの方、神様でしょうか、イエス様でしょうか、その方のたいせつなひととして、隣人である、デカポリスのひとたちをたいせつにしたのかも知れません。

[no.24b]

三つ目は、イエスが最後の晚餐のときに、弟子たちにつたえた「新しい掟」戒めです。

13:34 あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。35 互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」  
マルコ13章34節-35節（聖書協会共同訳）

[no.25]

神の御心がなる世界は、神様が、わたしたち一人ひとりを愛し、わたしたちも神様が愛し、わたしたちのそばに置かれている隣人を自分自身のように愛することと繋がっているようです。そして、イエスの願いは、イエスが弟子たちを愛したように、弟子たちも互いに愛し合うことです。ただ「互いに」は、あまり簡単なことではありません。自分の努力できることではありません。互いに愛し合う世界、これは、神様、そして、イエス様が望まれる平和なのかもしれません。

激しい突風が吹いたときにも、神様が一人ひとりを愛しておられることを信じることを思い出させようとされたのかも知れません。そしてそれは、一人の枷と鎖に繋がれ、人々から阻害され、墓に住んでいたような一人のひとのために、対岸まで向かわれる道中のこともあります。そのような愛をもって、一人ひとりに接しておられるイエスを見て、「わたしがあなたがたを愛したように」を理解するということなのでしょう。

神様の御心がなる世界、それが神の国だったわけですが、他の言い方では、神様の平和

かもしれません。それは、ゲラサ人の地での結末のように、人の考えるものとは異なるかも知れません。

町や村のひとたちは、多数のひとたちの力で、このひとを抑えておこうとしたわけですが、それを解放されることが、イエスの望まれることだったようです。神様の御心は、神の子イエスのされたことを通して、示されているのでしょうか。もしかすると逆に、このようなイエスを、神様は、「これは、わたしの愛する子」と呼ばれたのかも知れません。

最初に、平和とは、どのような状態なのだろうとみなさんに聞きました。それは、簡単には、答えられない問い合わせるように思います。

戦争の状態は、平和とは言えない。ある人が、枷や鎖で縛られていることによって得られることでもないようです。これは、平和とは言えないことを皆さんには、知っているかも知れません。しかし、それを排除することが、平和なのかはよく考えていただきたいと思います。イエスが説いているのは、神様の御心がなる世界を目指すこと。それは、神様の御心がどこにあるのかわからないことを考えると、神様の御心を求めるところなのかも知れません。そして、平和とは、なにか、少し違うように思うけれど、神様が愛されるように、自分と同じように、隣人を愛すること、そして、互いに愛し合うことのように思います。みなさんは、平和についてどう考えますか。どのように、平和を求めますか。

(49:27)

## 4.2 最後に

[no.26]

平和とは何なのでしょうか。わたしは最近、AI（人工知能）をよく使っています。平和についても、人工知能に聞くと、学問的な議論に関しても、いろいろな見方を教えてくれ、かつ、本なども、紹介してくれます。スライドにも、Geminiとの対話のリンクを付けておきますから、興味のあるかたは、見てみてください。平和についての問い合わせとともに、参考文献やその内容紹介もしてもらっています。

平和とは：<https://gemini.google.com/share/268c656eef7d>

個人的には、自分で考え、さまざまな問い合わせを持ってから、AIに聞いてみるのがよいと思いますし、AIからの応答に対しても、能動的に、問い合わせを投げかけられるかどうかが、深く理解できるかどうかの鍵だと思っています。みなさんも、AIを使うときには、今日、聖書を読むときにもそうしたように、ぜひ能動的に、問い合わせながら、使っていただきたいと思います。

私は、平和について最初に考えはじめたときは、戦争へと向かわないように、分断をさけることがまずは、たいせつなのではないかと考えました。しかし、今日の箇所でも、イエスと弟子たちは、同じことを共有できていたわけではないようですし、汚れた靈につかれたひとつと、ほかの町や村のひとたちを考えると、共に、平和になったということも、なさそうです。分断は、どの世界もあるのかも知れません。そのなかで、平和を求める、それは、どのような歩みなのでしょうか。最初に引用したクリスマスの聖句でも、「御心にかなう人々に平和があるように」でした。残念ながら、すべてのひとに、平和があるようではありません。これが、分断を助長するようなことでは、いけないと私は思います。

分断を助長しないようにしつつ、平和を願うとはどのようなことなのか。ぜひ、考えていただきたいと思います。

最初に、独立学園は、みなさんにとてたいせつな学びのための居場所となっているのではないかと話しました。ここにいるときも、ここから巣立っていくときも、たいせつな学びの起点となるためには、ともに学ぶ仲間をもつこともたいせつだと思います。問い合わせをたいせつにしましたが、自分だけではなく、他のひとの問い合わせとともに考える、たいせつにする学びの場であることを願っています。それは、この場で互いにたいせつにしあう、互いに愛する道なのかも知れません。

「平和とは」こんなことと簡単に言えることではありませんし、このようにすればよいと言えることもないように思います。しかし、同時に、御心を求め続けること、たいせつな方のたいせつなひとをたいせつにすること、自分が愛されていることをうけとめ、互いに愛し合うこととは、深く結びついているように思います。ぜひ、考えていただきたいと思います。

(53:00)

## References

- [1] 「今は、つぐないの時 - 日本兵を父に持つ南の島の三万余の子らへの愛の記録」 加藤亮一著、聖文舎（1975.12.10 発行、1981.1.20 2版）
- [2] 「プーチン、自らを語る」ナタリアゲヴォルクヤン著、高橋則明訳、扶桑社（2000/08発売）
- [3] 「自由 Freiheit」（上・下）アンゲラ・メルケル著、角川書店、（2025.5.28発売）
- [4] 「アルカイダ - ビンラディンと国際テロ・ネットワーク」ジェイソン・バーク著、坂井定雄・伊藤力司訳、講談社 (ISBN4-06-212476-9, 2004.9.10 第1刷発行)